落語　「笠碁」

成田　滋

昔の道楽といえば、「飲む」「買う」「打つ」。その内最もたちの悪いのが「打つ」、博打です。なにしろ身代を持ち崩し、家族が崩壊することが多かったようです。道楽ならぬ「道落」といわれる所以です。現代の「打つ」の代表は囲碁でしょう。落語は私の趣味の一つです。いくつかの囲碁にまつわる演目があります。そこにはいろいろな人物や話題が登場しますが、大抵はヘボ碁やザル碁。どれも江戸時代が舞台となります。

「笠碁」という演目があります。碁敵の美濃屋の隠居とある旦那の噺です。この二人は竹馬の友。棋力は初段から二段くらいのようです。今日も「待ったなし」という約束で打ち始めます。中盤までスラスラと何事もなく進むのですが、途中、旦那のいつもの癖がでます。「済まん、待ったさせてくれ！」

美濃屋の隠居は「約束は約束！」とどうしても引き下がりません。そのうち旦那は、三年前の借金の話を引き合いにして、返済を待ったしてやったというのです。ですが、隠居は「お金はお金、囲碁は囲碁」と一蹴します。そのうち、売り言葉に買い言葉になるのです。

　美濃屋の隠居　「借金の恩義があるから大晦日には、手伝いに行ってやれば蕎麦一杯も出さねえ、このしみったれのヘボ碁め」
　旦那　「帰れ、帰れ、このザル碁め」
　美濃屋の隠居　「金輪際、来るもんか！」

翌日から旦那は孫を連れて上野界隈をブラブラするのですが、退屈でしようがありません。「碁敵は憎さも憎し懐かし、」。喧嘩で啖呵を切ったことを悔やむの

です。それを見かねた番頭が云います。
　番頭　「旦那様、碁会所でも行ってはいかがですか？」
　旦那　「あんなとこ行ったかて相手はいない」
　番頭　「相手が。え？　相手が弱すぎて？」
　旦那　「強すぎるんや、皆目歯が立たん」

とうとう美濃屋の隠居も退屈さに耐えかねたのか、旦那の店の前をうろうろします。丁度雨の日です。それを旦那が呼び止めます。
　旦那　「やいやい、ザル野郎！」
　美濃屋の隠居　「なに、どっちがザルだ、このヘボ野郎！」
　旦那　「ヘボかヘボでねえか、一番やるか！」

こうして目出度く仲直りをし碁盤を囲みます。果たして「待った」が飛び出すのか、出ないか。サゲは「笠碁」を聴いてのお楽しみ。